

# 研究者紹介

## 林 瑞穂

(はやし みずほ)

農林水産政策研究所研究員

国際領域

### ●専門分野

地域研究（ブラジル）、ブラジル政治経済、ブラジル農業

### ●略歴

群馬県出身。

上智大学大学院グローバルスタディーズ研究科地域研究専攻修了。

三菱東京UFJ銀行、三井住友銀行を経て、2017年4月より現職。

2011年6月から2017年3月まで三井住友銀行ブラジル現地法人にて駐在。

### ●現在取り組んでいる主な研究テーマは？

世界有数の食料供給国であるブラジルの食料需給動向に関する研究を行っています。

### ●具体的にはどのような研究ですか？

ブラジルは、古くから、ラテンアメリカ地域の伝統的な一次産品であるコーヒーや砂糖の一大供給国として知られていますが、1990年代後半から次第に、旺盛な中国の需要等に応えるように、大豆、とうもろこし、牛肉といった非伝統的な分野でもメジャープレーヤーに変貌してきました。

今後のブラジルが世界に対して安定的に食料供給を行うことができるのか見定めるべく、この変容について理解することが肝要と考えています。そのために、中長期的な視座を持って、同国の農業政策や農業金融政策等の制度の変化を分析していきたいと考えています。

また、最近のアルゼンチン経済復調やメキシコの北米自由貿易協定（NAFTA）再交渉に伴う米国依存脱却への姿勢から、南米南部共同市場（Mercosur）の枠組みが再注目されはじめました。さらに、1999年から継続的に行われていました Mercosur と EU の自由貿易協定（FTA）に関する交渉も、2017年には決着するという観測ができました。これらの動きが、同市場域内大国であるブラジルの農業にどのような影響を与えるのかについてもフォローしていきたいと思っています。

### ●研究の特色は？

地域研究者として、フィールドワークによって得られた情報をもとに、歴史的な文脈のなかで地域の固有性を理解することを心がけています。

### ●今後の抱負は？

これまで民間金融機関で13年間勤務し、そのうち約6年間は邦銀のブラジル現地法人で駐在をしていました。これら実務を通じて体得した知識と現場感覚を継続的にブラッシュアップすることで、精度の高いブラジル農業セクター像を捉え、理解し、日本の農業政策に還元できるように努めて参りたいと考えています。

## 天野 通子

(あまの みちこ)

農林水産政策研究所研究員

食料・環境領域

### ●専門分野

フードチェーンからみた食の安全管理、農水産物の輸出、東アジアにおける食品産業の国際分業

### ●略歴

広島大学大学院生物圏科学研究科 博士（学術）取得。

愛媛大学 地域イノベーション戦略支援プログラム特任教授、広島大学 地（知）の拠点大学による地方創生推進事業特任教授を経て、2017年4月より現職。

### ●具体的には、どのような研究ですか？

食品の生産や流通を担う生産者や企業が、安全・安心な食を消費者に届ける仕組みをどのように構築しているか研究しています。国内の流通だけでなく、日本からの輸出や、海外からの輸入についても対象としています。

### ●研究の特色は？

農水産物の生産、加工、流通、販売、消費にいたる流れは、生産者、流通・加工業者の間にある複雑なネットワークと役割分担から成り立っています。このネットワークは、国内だけでなく海外へも広がっています。そのなかで、安全・安心な食品を提供するには、“フードチェーン・アプローチ”が有効だと考えられています。各事業者は、それぞれの生産・加工段階の工程を効率的に運営し、他者との間に連携を作ろうと努力しています。この考え方は、「農場から食卓へ」の距離が長くなるという、食生活の現実を踏まえたものです。

安全・安心な食を届けるための仕組みを導入するために、GAP（Good Agricultural Practice・Good Aquaculture Practice、農業生産工程管理・養殖生産工程管理）やHACCP（Hazard Analysis Critical Control Point）などに取り組み、国際的な第三者認証の取得を目指す生産者や企業が増えています。食の安全管理を強めることで、国内市場だけでなく海外への輸出も視野にいれることができます。これまで、こうした取組をおこなう養殖生産者や果樹生産者、水産加工企業などを中心に輸出動向の調査をおこなってきました。

### ●今後の抱負は？

フィールドワークを中心とした研究を重ねながら、安全・安心な食を将来にわたって持続的に提供する仕組みづくりに貢献したいと考えています。

## 竹島 久美子

(たけしま くみこ)

農林水産政策研究所研究員

農業・農村領域

### ●専門分野

農政学、農業構造問題、農地問題

### ●略歴

埼玉県出身。

宇都宮大学農学研究科修士課程修了。

東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程単位取得満期退学。

（一財）農政調査委員会専門調査員、早稲田大学非常勤講師を経て、2017年4月より現職。

### ●具体的には、どのような研究ですか？

現在、農業経営体は農地の供給層（貸し手）から農地を借り受けながら経営耕地面積の大規模化を進めています。その一方で、様々な理由から耕作放棄地や遊休農地が発生し、農山村の資源が有効に使われていない状況が生まれるといった動きも出ています。そのような動きは圃場の条件不利性から中山間地域で先んじて現れ、これまで様々な地域を対象に多くの研究が行われてきましたが、今後は人口減少社会に直面するなかで、都市的土地利用需要が減退し、むしろ都市の範囲が縮小していく「都市の縮退」が見込まれることから、私は都市と農村の間隙の地域（都市近郊、アーバンフリンジ）における農業的土地利用による土地利用の再編に関心を持ち、都市近郊で取り組まれている多様な担い手が参加した農地流動化や耕作放棄地解消の取り組みを対象に研究を行ってきました。

### ●研究の特色は？

これまでの研究では、行政やJA、市町村公社などが行う農地流動化施策が各地域でどのように取り組まれているのかについてアプローチしてきました。研究手法は事例調査が中心ですが、地域農業の特徴（地域性やその地域の歴史的背景、地域における様々なニーズへの対応）に応じて現場での創意工夫が様々な場面で発揮されており、それらの特徴を描き出すことで各事例が広く参考となるよう分析を進めています。

### ●今後の抱負は？

農林業センサスなどの統計で把握される農業・農村の姿と実際の農業・農村の姿を照らし合わせ、農業構造の変化を総合的に把握して、政策の立案に活かすことができればと思っています。